

資 料

大学生の子どもに対する母親の意識・行動

—母親自身の愛着スタイルとの関連性の検討—

梅本典子¹⁾・久崎孝浩²⁾

Mothers' attitudes and behaviors toward their child in college: The relationship between mothers' attitudes and behaviors and their attachment styles

Noriko UMEMOTO・Takahiro HISAZAKI

本研究は、大学生の子どもをもつ母親の子どもに対する意識・行動を把握するために尺度を作成した。因子分析をした結果、全43項目は次の5因子で構成されることが確認された：「同一視」「役割没入」「子ども扱い」「責任・管理」「干渉」。さらに、この尺度の各因子で把握される母親の意識・行動は母親自身の愛着スタイルを構成する2因子「見捨てられ不安」「親密性の回避」によってどのように予測されるのかを検討した。子どもの性別で母親を分けて階層的重回帰分析を実施したところ、(1) 女子大学生をもつ母親において見捨てられ不安の強さは同一視をポジティブに予測すること、(2) 女子大学生をもつ親密性の回避が強い母親において見捨てられ不安の強さは干渉をネガティブに予測すること、(3) 男子大学生をもつ母親においては見捨てられ不安の強さは責任・管理をポジティブに予測することが明らかになった。こうした結果から、母親の見捨てられ不安の強さは子どもに対する同一視や責任・管理を強めて子どもの自立を阻んでいる可能性が示唆された。

キーワード：母親、大学生、自立、愛着、見捨てられ不安

問 題

近年、中年期は、心理的变化、生物学（身体的変化、家族をとりまく変化、職業上の変化を伴う発達の危機を孕んだ時期として位置づけられている（岡本，2002）。岡本（2002）は、成人の心理的成熟は、「個」としてのアイデンティティとともに他者をケアし支える「関係性」に基づいたアイデンティティが職業を中心とする公的領域と家庭生活を中心とする私的領域にわたってバランスよく確立されることで成り立つとした。子どもをもつ成人においては子どもが成長して自立してくると、それまで家庭生活の中で子どもをケアし支える「関係性」を築くことで確立していたアイデンティティが崩壊する可能性を予見することができる。特に女性に多く見られる中年期の危機は、

「空の巣症候群」と呼ばれるように、子どもの自立または親離れに伴うものが多いという（岡本，2013）。子どもを出産して多くの関心と活力を注いできた子どもは成長とともに母親や家庭よりも家庭外の世界に関心を強くもつようになり、家庭を巣立っていくあたりから、喪失感や寂しさを伴う苦しさを経験するのである。

この喪失感や寂しさの感じ方は個人によって異なり、子どもの自立を容易に受け止めて克服する者もいれば、その一方で、子どもの自立との直面を避けて妨げるような言動をする母親もいるものと思われる。このような個人差が生じる要因の1つに、母親と家族との相互関係があるだろう。藤島・野島（2002）によれば、父親が家族との間に活発な情緒的かわりを持つことが母子間の過度な結びつきを防ぎ、母親は寂しさをあまり感じないで子どもの自立を受容していくという。また、長崎（2004）は、子どもから母親へのコミュニケーション行動が多いと認知している母親はそうでな

¹⁾ 熊本市障がい者福祉センター

²⁾ 九州ルーテル学院大学心理臨床学科
hisazaki@klc.ac.jp

い母親に比べて子どもの自立を受容できることを明らかにした。さらに、國吉・高橋（2004）は、夫婦関係が良好である母親は夫が子離れという課題にともに取り組み仲間のような存在となつて子どもの親離れに前向きな意識を持つことができるが、夫婦関係が良好でない母親は子離れという課題にひとりで立ち向かい、子離れに対する葛藤をなかなか解決できないでいるのではないかと述べている。こうした知見をまとめると、父親が家庭内で機能し夫婦関係が良好であれば、母子関係や母子間コミュニケーションに葛藤や歪みが少なく、母親は子どもの自立に受容的なのだと考えられる。

しかし、こうした母親を含む家族メンバー間の関係性だけでなく、母親の個人的特性も子どもの自立にともなう葛藤や喪失感・寂しさに影響を与える1つであろう。岡本（2002）によれば、家事労働に対する報酬は家族の愛情や感謝といった心理的で評価の曖昧なものであること、他者のために何ができたかが評価基準であるためその他者が自分を必要としなくなったとき基準が崩れてしまうことから、有職女性よりも専業主婦のほうが葛藤が大きいという。また長崎（2004）は、自尊感情の高い母親はそうでない母親に比べて子どもへの信頼感が高く、子どもの自立の受容ができていることを明らかにしている。

ただし、母親自身の有職無職、自尊感情や子どもへの信頼感のほかに、アタッチメント・スタイルも子どもの自立に対する母親の受容あるいは葛藤・喪失感をかなりのところ規定しているかもしれない。中高年である親は、体力が衰えていくことを実感し自分の健康に不安が生じ始める。さらに、新しいことを覚えることに困難を感じ、技術の進歩や社会の流れに戸惑うことも多い。一方、青年期の子どもは知力も体力も充実していく。親と子どもはそれまでの保護する者と保護される者という関係であったのが、子どもが青年期に至って老化が進んでいく親のほうに不安を強くして、子どもを頼ったり保護を求めたりすることもあるだろう。こうして親が幼少期から発達させてきたアタッチメントが子どもの自立と自身の老化に伴って再燃してくるものと思われる。母親によっては、乳幼児が養育者との分離や離別に対して示

す反応と同様の反応が青年期の子どもの自立に対して顕在化することもあるのではないだろうか。

アタッチメントは元来、乳児期から児童期の親子関係において注目された概念であるが、近年では、青年期・成人期の友人関係・恋愛関係・夫婦関係の成立・維持・崩壊に影響を及ぼす潜在的な要因として考えられるようになった（Hazan & Shaver, 1990）。Bowlby（1977）は、アタッチメントの行動パターンは時間や状況の変化に伴い徐々に変化することはあるが、基本的には半永続的に持続して成人後の親密な対人関係にも大きく影響するとしている。こうしたアタッチメント・システムが青年期の子どもの自立に直面している母親にも機能し、自立しようとする子どもに対する意識や行動に影響することはないだろうか。具体的には、不安定なアタッチメント・スタイルをもつ母親は、自立しようとする子どもに対して過剰に密着した行動や世話を示したり、子どもとの情緒的な交流を避けたり子どもの考えや気持ちに対して適切な共感ができなかったりするということがあるのではないだろうか。

そこで本研究では、まず、自立をひかえた大学生の子どもに対する母親の意識や行動の実態を把握するために、大学生の子どもに対する母親の意識・行動尺度の作成を試みる。続いて、その尺度によって把握された母親の各種意識・行動が、母親自身の愛着スタイルとどのように関連するのかを検討する。

方 法

調査対象

調査対象は、大学生の子どもを持つ39-63歳の母親76名である。平均年齢は、50.39歳（標準偏差4.78）であった。子どもの性別による母親の内訳は、女子学生をもつ母親が52名、男子学生をもつ母親24名であった。子どもが同居している母親は60名、子どもが別居している母親は16名であった。なお、調査期間は2017年7-10月であった。

手続き

まず、大学講義の受講学生を通じて母親に調査協力を求めた。講義の開始前に学生に調査協力のアナウンスを行ったが、その際に、調査協力の是非が受講している科目の成績に影響しないこと、

調査協力の意志のある学生にだけ母親が回答する質問紙を配布することを受講学生に周知した。講義終了後に授業調査協力の意志のある学生にだけ質問紙を入れた封筒を配布し、次のことを母親に伝達するよう要請した：①母親は質問紙に1週間以内に回答する；②母親は質問紙に回答した後はその質問紙をもとの封筒に入れて厳封する；③厳封された質問紙を子どもである学生に手渡す。こうして、母親が回答した質問紙は翌週の講義に子どもである学生によって持参され、回収された。

また、筆者らの友人・知人である、大学生の子どもをもつ母親にも、質問紙と切手を貼った返信用の封筒を直接手渡して調査協力を依頼した。その母親たちにおいても、1週間以内に質問紙に回答して、回答した質問紙は厳封して郵送するよう要請した。

質問紙

以下の内容からなる質問紙を作成した。

(1) **フェイスシート**：調査対象である母親の年齢、子どもの人数、大学生の子どもの性別、子どもと同居か否かについて尋ねて記入を求めた。

(2) **大学生の子どもに対する母親の意識・行動の尺度**：大学生が認知する親からの自立性援助の程度を測定する「親からの自立性援助測定尺度」(櫻井, 2003)、母親がどの程度子どもの意見を尊重して自らの干渉を控えるかを尋ねる「子供の自立に対する母親の意識尺度」(長崎, 2004)、大学生が自分自身の心理的自立に関与したと認知する親の態度を測る「親の自立促進的態度尺度」(田中, 2012)などを参考にして、子どもの自立に対して母親が経験すると思われる感情・態度・行動にかかわる52項目を作成した(例えば、「子どもの将来がいつも気にかかる」「子どもの一日の行動を、常に把握するようにしている」など)。回答は5件法で求められ、各項目の質問に対して調査対象者である母親は「5. 非常によく当てはまる」から「1. まったく当てはまらない」の選択肢の中から該当するものを1つ選択した。

(3) **一般他者版成人愛着尺度 (ECR-GO)**：この尺度は、恋人を対象として成人の愛着スタイルを測定する Brennan, Clark, & Shaver (1998) の「親密な対人関係体験尺度 (ECR)」をもとに中尾・加藤 (2004) が作成した、一般化された他者を想

定し回答させる愛着スタイル尺度である。Brennan et al. (2004) は ECR を開発するにあたり、2次元・4分類愛着スタイルモデルを仮定している。このモデルでは、「自己観 (自己についての内的作業モデル)」と「他者観 (他者についての内的作業モデル)」がそれぞれポジティブかネガティブかによって4つの愛着スタイルが構成される。具体的には、①安定型は自己観と他者観がともにポジティブなスタイル、②拒絶型は自己観がポジティブで他者観がネガティブなスタイル、③とらわれ型は自己観がネガティブで他者観がポジティブなスタイル、④恐れ型は自己観と他者観がともにネガティブなスタイル、となる。ECR は「見捨てられ不安」(自己観に対応)と「親密性の回避」(他者観に対応)と命名された2つの下位尺度から構成されるが、Brennan et al. (2004) がこのように命名したのは、「自己観がポジティブ」ということは「自分自身は愛着対象によっていつでも援助を受けることができる存在であり、愛着対象から見捨てられる不安が低い」ということであり、「他者観がポジティブ」ということは「愛着対象との情緒的な交わりや親密な関係を恐れることなく回避しない」ということであると考えたためである。したがって、「見捨てられ不安が高い」とは「自己観がネガティブである」ということを示し、「親密性の回避が高い」とは「他者観がネガティブである」ということを示す。一般他者版成人愛着尺度も、ECR と同様、「見捨てられ不安 (18項目)」と「親密性の回避 (12項目)」という2つの下位尺度から構成され、4つの愛着スタイル群を反映していることが確認されている(例えば、見捨てられ不安の項目として「私は一人ぼっちになってしまうのではないかと心配する」、親密性の回避の項目として「私は人に心を開くの抵抗を感じる」など)。回答法は7件法で求められ、調査対象者である母親は各項目に対して「7. 非常によく当てはまる」から「1. 全く当てはまらない」の選択肢の中から該当するものを1つ選択した。

分析

まず、大学生の子どもに対する母親の意識・行動の尺度 (52項目) について因子分析を行い、下位尺度を抽出した。続いて、得られた下位尺度の

内的整合性を α 係数で確認した。そして最終的に、一般他者版成人愛着尺度 (ECR-GO) で測定される「見捨てられ不安」と「親密性の回避」が大学生の子どもに対する母親の意識・行動の尺度の各下位尺度とどのような関連性があるのかを検討するために相関分析を行った。なお、「見捨てられ不安」の高い母親は自分自身が他者から見捨てられることなくいつでも援助が施されると感じていないために子どもに対しても見捨てられる不安を経験しやすく、子どもが離れて自立していくのを妨げるような態度・行動をとりやすいのではないかと想定される。一方、「親密性の回避」が高い母親は他者との情緒的な交わりや親密な関係を恐れて回避する傾向が強いため子どもに対しても情緒的な交流を求めようとせず、子どもの自立を歓迎したり後押ししたりする態度・行動をとりにくいのではないかと想定される。

結果・考察

大学生の子どもに対する母親の意識・行動の尺度の作成

(1) 因子分析：まず、大学生の子どもに対する母親の意識・行動の尺度52項目について得点分布を確認したところ、いくつかの質問で得点分布の偏りがみられた。各項目について平均値と標準偏差を求めたところ、天井効果およびフロア効果のみられた4項目³⁾が確認され、それらの項目のデータは因子分析から外した。残りの48項目について重みなし最小二乗法による最初の因子分析を行ったところ、固有値の変化は14.632, 4.251, 2.563, 2.287, 2.198, 1.814, 1.589, …となり、5因子構造が妥当だと考えられた。そこで5因子を仮定した重みなし最小二乗法・バリマックス回転による因子分析を再び行った。その結果、5つの因子のどこにも十分な負荷量を示さなかった5項目³⁾が特定された。最終的にそれらの項目のデータも除外して、重みなし最小二乗法・バリマックス回転による3回目の因子分析を行った。バリマックス回転後の因子構造を Table 1に示す。なお、回転前の5因子で43項目の全分散を説明する割合は49.1%であった。

第1因子は11項目で構成されており、「子どもから相談してくるのを待てない」「子どもが失敗

しないようにあれこれ指示する」「子どもに親の価値観を押し付ける」「子どもが失敗したら自分のことのようにうろたえる」など、子どものことを自分のことのように感じて行動してしまう内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで第1因子を「同一視」因子と命名した。

第2因子は10項目で構成されており、「子どものためなら自分を犠牲にできる」「子どものためならどんなこともする」「子どもは私のすべてである」など、子どもに献身して母親という役割に自己投入する内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで第2因子を「役割没入」因子と命名した。

第3因子は7項目で構成されており、「子どもは頼りなく感じる」「子どもは何事かあれば自分で立ち直るのは難しい」「子どもはまだ『子ども』だと思う」など、青年期の子どもの成長した部分よりも未熟なところに目が向いてしまう内容の項目が高い負荷量を示した。そこで第3因子を「子ども扱い」因子と名付けた。

第4因子は8項目で構成されており、「子どもの帰宅時間が遅いと注意する」「子どもが帰宅するまで心配でたまらない」「子どものことはすべて知っておきたい」など、子どもが失敗や間違いをすることは親の責任であると感じて子どもの行動を統制・管理しようとする内容の項目が高い負荷量を示した。そこで第4因子を「責任・管理」因子と命名した。

第5因子は7項目で構成されており、「子どもの友人に好ましくない人物がいる場合付き合いをやめるよう言う」「子どもに干渉するのは親として当然だ」「子どもの外出先が好ましくないと思ったら行かないように言う」など、子どもの行動に口出しするのは親として当然であると考えて意見する内容の項目が高い負荷量を示した。そこで第5因子を「干渉」因子と命名した。

(2) 下位尺度の内的整合性：各下位尺度の α 係数を算出したところ、「同一視」で .90, 「役割没入」で .86, 「子ども扱い」で .87, 「責任・管理」で .86, 「干渉」で .84と十分に高い値が得られた。各下位尺度の内的整合性は問題ないことが確認された。

Table 1 大学生の子どもに対する母親の意識・行動尺度の因子分析結果（回転後の因子パターン）

項目 番号	項目内容	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ	因子Ⅴ
29	子どもが自分から相談してくるのを待てない	.686	.110	.144	.207	.197
23	子どもが失敗しないようにあれこれ指示する	.669	.341	.257	.188	.127
21	子どもに親の価値観を押し付ける	.642	.031	.288	.262	.256
24	子どもが失敗したら、自分のことのようにならざる	.635	.413	.317	.03	-.072
17	子どものすることに手を出してしまう	.633	.159	.213	.078	.141
25	子どもの行動を常に把握していないと気が済まない	.583	.245	.371	.361	-.011
28	就寝や起床、食事などの生活習慣に口を出す	.545	.086	.014	.117	.203
18	子どもに自分自身のことを任せることはできない	.537	-.008	.504	.235	.116
27	子どもの服や日用品を準備する	.533	.188	.150	-.233	.038
10	子どもの小遣いの使い方を指示する	.499	.090	.095	.358	.330
26	子どもの勉強スケジュールについて口を出す	.495	.240	.392	.226	.086
48	子どものためなら、自分を犠牲にできる	.215	.801	-.278	-.079	.134
47	子どものためなら、どんなことでもする	.209	.739	-.152	.032	-.040
38	子どもは私の全てである	.089	.705	.217	.340	-.064
49	子どものためなら、たいいていのことは我慢できる	.033	.660	-.002	-.093	.237
1	子どもと一緒にいる時が一番幸せである	.011	.549	.006	.226	-.069
39	子どものことに一所懸命だ	.086	.534	.169	.239	.106
33	子どもが反抗すると、落胆する	.362	.528	.115	.278	-.095
46	母親であることが、自分の存在価値である	.327	.470	.142	.085	.189
51	将来、子どもの婚活をサポートするつもりだ	.393	.408	.106	.356	.245
52	子ども部屋あるいは子どもが住んでいる貸家（アパート）を掃除する	.128	.398	.116	.112	.214
16	子供は頼りなく感じる	.193	-.175	.749	.023	.226
15	子どもは、何事かあれば自分で立ち直るのは難しいと思う	.158	.063	.712	.158	.094
12	子どもはまだまだ「子ども」だと思う	.011	.166	.646	.100	.206
19	子どもを大人として扱うことは難しい	.293	.002	.613	.264	.146
22	子どものことを子ども自身で決めさせるのは難しい	.305	-.004	.597	.195	.352
11	子どもが自分のことに責任をとれるか心配だ	.311	-.036	.577	.114	-.007
14	子どもの行動がとて心配である	.368	.211	.505	.213	.141
35	子どもの帰宅時間が遅いと注意する	.023	.079	.244	.730	.227
36	子どもが帰宅するまで、心配でたまらない	.287	.415	.125	.595	-.023
37	子どものことはすべて知っておきたい	.287	.393	.279	.579	.140
50	子どものアルバイト先は、自分の目で確かめておきたい	.446	.121	-.039	.479	.296
34	子どもの将来の就職先は、事前に自分の目で確かめておきたい	.247	.314	.214	.475	.234
31	子どもの一日の行動を、常に把握するようにしている	.294	.291	.341	.456	.131
32	外出先から連絡を入れえるように子どもにいう	.169	.052	.114	.439	.248
40	子どもが失敗や間違いをすることは、親の責任である	-.045	.375	.358	.403	.185
9	子どもの友人に好ましくない人物がいる場合、付き合いをやめるよう言う	.056	.030	.081	.047	.649
13	子どもに干渉するのは、親として当然だ	.008	.271	.418	-.032	.586
30	子どもの外出先が好ましくないと思ったら、行かないように言う	.248	.102	.181	.295	.569
8	子どもの結婚については、親の考えに従わせる	.397	-.045	.273	.208	.543
43	子どもに趣味が好ましくないと思ったら、意見する	.127	.072	.263	.297	.541
7	子どもの交際相手に好感がもてない時は、付き合いをやめるように言う	.199	.058	.032	.237	.521
20	子どもに口出しするのは親として当たり前だ	.225	.350	.474	-.092	.517

Table 2 子どもに対する母親の意識・行動尺度下位尺度の男女別平均値と標準偏差およびt検定の結果

	女子学生		男子学生		t 値
	平均	SD	平均	SD	
同一視	0.03	0.95	-0.81	0.92	0.39
役割没入	0.07	0.95	-0.14	0.99	0.86
子ども扱い	0.07	0.97	-0.16	0.86	1.02
責任・管理	0.24	0.87	-0.52	0.81	3.60**
干渉	0.02	0.91	-0.04	0.94	0.281

*p<.05, **p<.01

Table 3 子どもに対する母親の意識・行動尺度下位尺度の出生順位別の平均値と標準偏差

	長子		中間子		末子		F 値
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
同一視	0.14	0.93	-0.05	0.00	-0.42	0.88	0.57
役割没入	0.08	0.90	-0.01	0.91	-0.22	1.24	0.59
子ども扱い	-0.15	0.96	0.08	0.84	0.23	0.64	1.50
責任・管理	0.11	1.05	-0.14	0.70	-0.22	0.75	1.07
干渉	0.07	0.95	-0.04	0.79	0.02	0.03	1.42

Table 4 子どもと同居している母親と同居していない母親の意識・行動尺度下位尺度の平均値と標準偏差

	子どもと同居		子どもと同居でない		t 値
	平均	SD	平均	SD	
同一視	0.04	1.00	-0.16	0.63	0.77
役割没入	-0.01	0.95	0.03	1.03	-0.14
子ども扱い	0.12	0.98	-0.45	0.58	2.21*
責任・管理	0.04	0.96	-0.16	0.74	0.79
干渉	0.08	0.94	-0.28	0.74	1.41

*p<.05

子どもの性別による母親の意識・行動の差異

大学生の子どもに対する母親の意識・行動がその子どもの性別によってどのように異なるのかを検討するために、大学生の子どもに対する母親の意識・行動尺度の下位尺度得点について子どもが男子学生の場合と女子学生の場合それぞれの平均値を算出し、さらにその平均値差についてt検定を行った (Table 2参照)。各因子の得点は、平均が0になるように回帰法で推定して得点化した。t検定の結果、「責任・管理」について子どもが男子学生の場合よりも女子学生の場合の方が有意に高い得点を示した ($t(74)=3.60, p<.01$)。この結果から、母親は女子学生に対して男子学生よりも強く責任を感じて子ども行動を統制・管理しよ

うとしていることが推察された。母親は大学生の娘が同性であるがゆえに、その娘の生活や自立に対して異性である大学生の息子以上に責任を強く感じてしまうのかもしれない。

母親の意識・行動に対する子どもの出生順位の影響

子どもの出生順位によってその子どもに対する母親の意識・行動が異なるのかを検討するために、母親の意識・行動の各下位尺度得点を従属変数とし、出生順位 (3水準: 長子, 中間子, 末子) を1要因とする分散分析を行った。その結果、どの下位尺度においても出生順位の主効果は有意ではなかった (Table 3参照)。大学生になる子どもの出生順位がその子どもの母親の意識・行動に直接

Table 5 大学生の子どもに対する母親の意識・行動と母親自身の愛着スタイルとの間の相関係数

		同一視	役割没入	子ども扱い	責任・管理	干渉
全体	見捨てられ不安	.39**	.12	.25*	.20	-.08
	親密性回避	-.05	.05	.11	.04	-.22
女子	見捨てられ不安	.41**	.14	.31*	.19	-.13
	親密性回避	-.05	-.08	.10	-.00	-.18
男子	見捨てられ不安	.38	.03	.08	.51*	.09
	親密性回避	-.04	.30	.17	.25	-.30

* $p<.05$, ** $p<.01$

影響するということはないようである。

母親の意識・行動に対する子どもとの同居による影響

母親が大学生の子どもと同居しているか否かによって、その子どもに対する母親の意識・行動も大きく異なってくる可能性がある。そこで、子どもに対する母親の意識・行動の下位尺度得点について子どもと同居している母親とそうでない母親との間に有意差があるか検討するためにt検定を行った (Table 4参照)。その結果、「子ども扱い」において子どもと同居している母親の方が同居していない母親よりも有意に高かった ($t(74)=2.21$, $p<.05$)。子どもと同居している母親は日頃から子どもの行動が常に目に入り、子どもの未熟なところに注意を向けがちであるために、「子ども扱い」してしまう傾向が強まるものと推察された。

母親の意識・行動に対する母親自身の愛着スタイルの影響

大学生の子どもに対する母親の意識・行動に対して母親自身の愛着スタイルがどのように影響しているかを検討するために、一般他者版成人愛着尺度の2つの下位尺度と大学生の子どもに対する母親の意識・行動尺度の5因子との間の相関係数を算出した (Table 5参照)。まず、子どもの性別に関係なく全体で算出した相関係数をみると、母親自身の見捨てられ不安は同一視や子ども扱いとの間に有意な正の弱い相関を示した。つまり、見捨てられ不安の高い母親ほど大学生の子どもに対して同一視や子ども扱いをしやすいたことが明らかになった。この結果から、見捨てられ不安の高い母親は自信に乏しいために自分自身を自信に満ちた子どもに重ねてみたり、未熟だと捉えている自

分自身をもとにして子どもをみてしまうために子どもも未熟だと解して「子ども」として接したりしてしまうのではないかと思われる。

また、親密性の回避と干渉との間に負の弱い相関の有意傾向 ($p<.1$) がみられた。有意ではないが、親密性の回避の強い母親ほど子どもに干渉しないことが分かった。これを解釈するならば、他者との情緒的な交わりに恐れを感じやすい母親は自分の子どもに対しても情緒的な交わりを避けてしまいがちで、結果的に子どもにあまり干渉しないということが考えられる。

さらに、子どもの性別ごとに、母親自身の見捨てられ不安や親密性の回避と母親の子どもに対する意識・行動尺度の5因子との間の相関係数を算出した (Table 5参照)。女子学生の子どものをもつ母親においては、見捨てられ不安が同一視や子ども扱いとの間に有意な正の弱い相関を示した。この結果は、子どもの性別に関係なく全体で相関関係を分析した際に明らかになった上記の結果と同じである。子どもが女子学生の場合、同性であることから子どもに対してさらに同一視しやすく、見捨てられ不安の強い母親は自信に乏しく、大学生の娘の考えや行動が自分自身と同じでないと不安が高くなるものと推察される。また、見捨てられ不安の強い母親は自分自身の未熟さを大学生の娘に投影して見てしまうために、大学生の娘を子ども扱いしてしまうのではないかと考えられる。

一方、男子学生の子どものをもつ母親においては、見捨てられ不安と責任・管理との間に正の比較的強い相関が有意であった。見捨てられ不安の強い母親ほど大学生の息子に対して責任を感じて行動や生活を管理しやすいたことが分かった。この結果から、見捨てられ不安の強い母親は自信に乏しい

Table 6 子どもの性別ごとに子どもに対する母親の意識・行動に対する母親自身の愛着スタイルの影響を重回帰分析で検討した結果

従属変数	独立変数	見捨てられ不安と 親密性の回避の投入	交互作用項の 追加投入
		$\beta^{(a)}$	β
女子大学生をもつ 母親の同一視	見捨てられ不安	.405**	.338*
	親密性の回避	-.058	-.090
	見捨てられ不安×親密性の回避		-.213
	R ² ^(b)	.167*	.187*
	ΔR^2 ^(c)		.020
女子大学生をもつ 母親の干渉	見捨てられ不安	-.134	-.316*
	親密性の回避	-.177	-.264
	見捨てられ不安×親密性の回避		-.577**
	R ²	.050	.194*
	ΔR^2		.144**
男子大学生をもつ 母親の責任・管理	見捨てられ不安	.531**	.557**
	親密性の回避	.292	.263
	見捨てられ不安×親密性の回避		-.148
	R ²	.343*	.356*
	ΔR^2		.013

^(a) β : 標準偏回帰係数 ^(b) R²: 決定係数 ^(c) ΔR^2 : 決定係数の変化量 *p<.05 **p<.01

上に、性別の違いから大学生の息子の行動を理解できないことも多いため、子どもの行動や生活を管理してひいては大学生の息子を自分の側に置こうとするのではないかと推察される。

重回帰分析を用いた母親の意識・行動に対する母親自身の愛着スタイルの影響の検討

先ほどは、子どもの性別ごとに母親の見捨てられ不安や親密性の回避と母親の子どもに対する意識・行動尺度5因子との間の相関係数を検討し、部分的に有意な相関関係が見られた。そこでさらに、子どもの性別ごとに、母親自身の見捨てられ不安と親密性の回避を独立変数とし、母親の子どもに対する意識・行動各因子を従属変数とする重回帰分析を行った。本研究での重回帰分析では、まず1つの従属変数に対して見捨てられ不安と親密性の回避の2つの独立変数を投入したモデルの決定係数R²の有意性検定をした。また、そのモデルに見捨てられ不安と親密性の回避の交互作用項を独立変数として投入したモデルの決定係数変化量の有意性を検定した。例えば、他者との交わりを恐れる母親はそれを恐れない母親に比べて孤

立しやすく、見捨てられ不安が強いと上手くそれも抑制することができずに、子どもに対する意識や行動も歪なものになりやすいと考えられ、見捨てられ不安と意識・行動のつながりの強さは親密性の回避の強さによって調整される可能性が考えられる。そのため交互作用項も含むモデルを検討する必要がある。こうしたモデルの有意性検定の結果にしたがってモデルを決定した。なお、交互作用を含んだモデルが有意である場合、親密性の回避の平均±1SDで群分けをして親密性の回避低群と高群それぞれで見捨てられ不安の単純傾斜の検定を行った。なお、今回の統計的分析ではソフトウェアとしてR-3.5.1を用いた。

(1) 女子大学生をもつ母親の場合：女子大学生をもつ母親52名のデータをもとに重回帰分析を行った。その結果、役割投入、子ども扱い、責任・管理それぞれを従属変数とし、見捨てられ不安と親密性の回避を独立変数とする重回帰モデルは有意でなかった(役割没入: R²=.025, ns.; 子ども扱い: R²=.101, ns.; 責任・管理: R²=.014, ns.)。また、それらのモデルに見捨てられ不安と親密性の回避

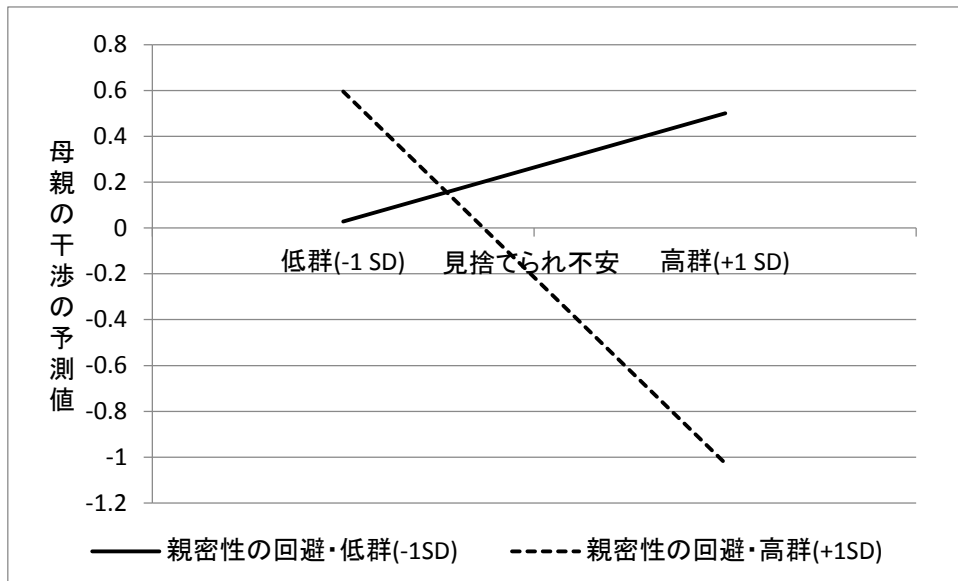


Figure 1 大学生の娘をもつ母親の干渉における親密性の回避の高低群それぞれで見捨てられ不安の単純傾斜

の交互作用項を追加投入したモデルでも決定係数の増加は有意でなかった（役割没入： $\Delta R^2=.018$, ns.; 子ども扱い： $\Delta R^2=.003$, ns.; 責任・管理： $\Delta R^2=.006$, ns.）。

しかし、同一視を従属変数とし、見捨てられ不安と親密性の回避を独立変数とする重回帰モデルは有意であった（ $R^2=.167$, $p<.05$ ）。さらに交互作用項を投入したが、決定係数は有意に増加しなかった（ $\Delta R^2=.020$, ns.）ため、交互作用を含まない重回帰モデルが採用された（Table 6参照）。この結果より、女子大学生である娘のことを自分のことのように感じて行動する傾向には見捨てられ不安が貢献していることが明らかになった。いざ助けが必要なときに他者から助けが得られないのではないかという不安が強いと母親は自信を失って自分自身のことを大学生である娘に重ねてみる投影の傾向が高まり、娘を同一視してしまうのかもしれない。

干渉を従属変数とした重回帰モデルについては、見捨てられ不安と親密性の回避を独立変数とした場合には有意でなかった（ $R^2=.050$, ns.）が、見捨てられ不安と親密性の回避の交互作用項を追加投入した場合に決定係数とその増加のどちらも有意になった（ $R^2=.194$, $p<.05$; $\Delta R^2=.144$,

$p<.01$ ）ため、交互作用項を含む重回帰モデルが採用された（Table 6参照）。交互作用が有意であったのでさらに単純傾斜検定を行ったところ、親密性の回避が高い群（+1SD）において見捨てられ不安の単純傾斜が有意であった（ $t=3.08$, $p<.01$ ）。Figure 1に示したように、親密性の回避が高い群では、見捨てられ不安の低い群（-1SD）より高い群（+1SD）で干渉の得点が有意に低かったことから、親密性の回避の高い母親の中でも見捨てられ不安の強い母親は子どもに干渉しない傾向があるということが明らかになった。他者との間で情緒的な交流を結ばず他者の助けを求めにくいところであって、さらに助けを求めても他者は応じてくれないのではないかと不安も強い母親は、他者に関わることにそのものに恐れをなして、大学生である娘に対する関わりも干渉に至らないほどに希薄なものになっているのではないだろうか。こうした母親は娘との情緒的な交わりや娘から嫌われ見放されることを恐れて、娘に対する関わりは混乱したものになっているかもしれない。

（2）男子大学生をもつ母親の場合：男子大学生の子どもをもつ母親24名のデータをもとに上記のステップによる重回帰分析を行った。同一視、役割没入、子ども扱い、干渉をそれぞれ従属変数

とし、見捨てられ不安と親密性の回避を独立変数とする重回帰モデルは有意ではなかった(同一視: $R^2=.146$, ns.; 役割没入: $R^2=.095$, ns.; 子ども扱い: $R^2=.039$, ns.; 干渉: $R^2=.094$, ns.)。これらの従属変数に対して見捨てられ不安と親密性の回避の交互作用を追加投入したモデルでも決定係数の増加は有意でなかった(同一視: $\Delta R^2=.000$, ns.; 役割没入: $\Delta R^2=.001$, ns.; 子ども扱い: $\Delta R^2=.003$, ns.; 干渉: $\Delta R^2=.15$, ns.)

しかし、責任・管理を従属変数とし、見捨てられ不安と親密性の回避を独立変数とする重回帰モデルは有意であった($R^2=.343$, $p<.05$)。さらに見捨てられ不安と親密性の回避の交互作用項をモデルに投入したが、決定係数の増加は有意でなかった($\Delta R^2=.013$, ns.)。ため、交互作用を含まない重回帰モデルが採用された(Table 6 参照)。この結果から、母親の子どもに対する責任の意識や管理する行動には母親自身の見捨てられ不安が大きく寄与していることが明らかになった。すなわち、助けが必要ときに他者から見捨てられるのではないかと母親自身の不安は男子大学生である息子の行動や生活に対する責任の意識を高めて、息子の行動や生活を管理・統制しようとする行動を駆り立てている可能性がうかがえた。

結論

本研究は、子どもが成長して中高年の母親から離れていくことが母親にとってあたかも乳児が養育者との分離や離別に対して示す反応と同様の過程をたどるのではないかと想定して、やがて自立を迎える大学生の子どもに対する母親の意識・行動に関する尺度構成を試みた。因子分析の結果、大学生の子どもをもつ母親の意識・行動には「同一視」「役割没入」「子ども扱い」「責任・管理」「干渉」といった側面があることが確認された。

また、こうした母親の意識・行動には母親自身の愛着スタイルがどのように関与しているのかを検討した。その際、「見捨てられ不安」の高い母親は子どもが離れていくことに不安を感じて子どもの自立を妨げるような行動をする、「親密性の回避」が高い母親は子どもとの情緒的交わりが少ないため、子どもの自立に無関心で自立を手助けしない、と仮定した。まず、子どもの性別に関係

なく全体で相関分析を行うと、見捨てられ不安と同一視や子ども扱いとの間に有意な正の相関が認められた。子どもの性別ごとに相関分析を行った場合でも、女子大学生をもつ母親で見捨てられ不安と同一視や子ども扱いとの間に有意な正の相関が認められた。また、男子大学生をもつ母親で見捨てられ不安と責任・管理との間に有意な正の相関が認められた。そこで、母親の意識・行動を従属変数とし、見捨てられ不安と親密性の回避を独立変数とするモデルの重回帰分析、さらにそのモデルに見捨てられ不安と親密性の回避の交互作用項を追加投入したモデルの重回帰分析を実施した。その結果、女子大学生をもつ母親では、見捨てられ不安が強いと同一視しやすいこと、親密性の回避が強いうえに見捨てられ不安も強いと干渉しにくいことが明らかになった。また男子大学生をもつ母親では、見捨てられ不安が強いと責任・管理の傾向が高くなることが明らかになった。こうした結果から、母親の中で形成された愛着スタイルが、自立を控えている大学生の子どもとの関係やその関係の中で展開される母親の行動に幾らか影響を及ぼしていることが確認された。子どもは成長とともに様々な力を発達させながら自立していくが、一方で老いていく中高年の母親からすればそれは頼りになる重要な対象との分離のプロセスであり、この時期の母親と子どもの関係において見られる母親の一部の行動は乳児が養育者との分離や離別に対して示す反応に似たプロセスを辿るのかもしれない。それが、母親の愛着スタイルが大学生の子どもに対する母親自身の意識や行動に影響を及ぼす背景にあるのではないだろうか。

本研究は母親の心中にある「一般他者に対する愛着」と「大学生の子どもに対する母親の態度」の繋がりを幾らか明らかにすることができたが、母親の意識・行動を大学生の子どもはどのように受け止めて理解しているか、またそれが大学生の子どもにどのような影響を及ぼしているか、そして母親の夫婦関係のあり方が大学生の子どもに対する母親の意識・行動にどのような影響を及ぼしているかを明らかにするには至らなかった。今後、そのような問題に目を向けて、母親と大学生の子ども間で生じる相互影響過程を明らかにする必要があるだろう。

注

- 1) 天井効果・フロア効果を示して因子分析から除外された項目および5因子のどれに対しても負荷量が小さく因子分析の対象外となった項目は、項目番号2 “子どもの将来がいつも気にかかる”, 項目番号3 “子どもが日頃考えていることがわかる”, 項目番号4 “最近、子どもと会話が少なくなって淋しい”, 項目番号5 “子どもに手がかからなくなって、心の中に穴が開いたようだ”, 項目番号6 “母親が子どものことを考えているほどには、子どもは母親のことを考えていない”, 項目番号41 “子どもにアルバイトを許可しない”, 項目番号42 “子どものアルバイトに口出しする”, 項目番号44 “子どもの読む本をチェックして評価する”, 項目番号45 “子どもの携帯をチェックする”である。

文献

- Bowlby, J. (1977). The making and breaking of affectional bonds. *The British Journal of Psychiatry*, **130**, 201-210.
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. (1998). Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships* (pp.46-76). New York: The Guilford Press.
- 藤島裕子・野島一彦 (2002). 母親による子どもの自立の受容に関する研究—父親の家族との関わり方をめぐって 九州大学心理学研究, **3**, 59-68.
- Hazan, C. & Shaver, P. R. (1994). Attachment as an organizational framework for research on close relationships. *Psychological Inquiry*, **5**, 1-22.
- 加藤和生 (1998). Barsolomew らの4分類成人愛着尺度 (RQ) の日本語版の作成 認知・体験過程研究, **7**, 41-50.
- 國吉裕加・高橋靖恵 (2004). 青年期の子どもを持つ母親の子離れに関する研究：夫婦関係認知という視点から 日本青年心理学会大会発表論文集, **12**, 24-25.
- 長崎千夏 (2004). 子どもの自立に対する母親の意識と自尊感情との関連 九州大学心理学研究, **5**, 63-170.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004). 成人愛着スタイル尺度 (ECR) の日本語版作成の試み 心理学研究, **75**, 154-159.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, **5**, 19-27.
- 岡本祐子・松下美知子 (2002). 新 女性のためのライフサイクル心理学 福村出版
- 櫻井茂男 (2003). 子どもの動機づけスタイルと親からの自立性援助との関係 筑波大学発達臨床心理学研究, **15**, 25-30.
- 田中輝美 (2012). 大学生の認知する親の自立促進的態度と心理的自立の関連について カウンセリング研究, **45**, 218-228.

(受稿：12月10日，受理：2月7日)

Title: Mothers' attitudes and behaviors toward their child in college: The relationship between mothers' attitudes and behaviors and their attachment style

Noriko UMEMOTO・Takahiro HISAZAKI

This study developed a scale for measuring mothers' attitudes and behaviors toward their child in college and then examined how mothers' two factors in attachment style, "anxiety" and "avoidance", predicted their own attitudes and behaviors toward their child in college. Factor analysis of 43 items in the scale showed that there were five factors: "identification", "devotion to the role of mother", "treatment as a child", "responsibility and control", and "interference". Hierarchical multiple regression analysis of the mothers' data which were separated by their child's gender showed some results as follows: (1) Anxiety positively predicted identification in the mothers with a daughter in college; (2) Anxiety negatively predicted interference in the mothers of higher avoidance with a daughter in college; (3) Anxiety positively predicted responsibility and control in the mothers with a son in college. These results suggest that mothers with high anxiety tend to identify their child as themselves and to take responsibility for and control their child's behavior and life, which would hamper their child's effort to become independent.

Key words: mother, child in college, becoming independent, attachment, anxiety of abandonment